慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『ジョン・ マンデヴィルの書』とアメリカの発見
Sub Title	The book of John Mandeville and the discovery of America
Author	松田, 隆美(Matsuda, Takami)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.1 (2020. 12) ,p.5- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	巽孝之教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190001-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ジョン・マンデヴィルの書』とアメリカの発見

松田　隆美

ヨーロッパ中世とアメリカの関わりは決して浅くはない。中世の再検討は20世紀の課題だったが、ノーマン・カンターの『中世の発見』(1991)に代表されるように、その概念形成と再検討の両方においてアメリカのアカデミアは中心的役割を果たしてきた。中世文学に限っても、1960年代に聖書釈義学を作品解読に徹底的に応用したのも、1980年代に（それ自体アメリカで誕生した）新歴史主義を、近代を立体的に描くために中世を一枚岩的に想定したと批判したのも、アメリカの中世研究である。[1]

アメリカの中世へのこだわりは、そもそもコロンブスによるアメリカ大陸発見が、ヨーロッパが歴史的区分において未だ中世であった時代の出来事であることを思い起こすならば、当然かも知れない。中世の制度的枠組みは新大陸（特にラテン・アメリカ）に移植されて、彼の地でもっとも遅くまで存続したという指摘もある。[2]そして何よりも、コロンブスが中世後期のベストセラー『ジョン・マンデヴィルの書（*The Book of John Mandeville*）』（『マンデヴィルの旅』）に触発されて（騙されて）船出し、この旅行記が描き出す世界像に基づいて、自分はインドの諸島に上陸し、さらに地上楽園の近くに到達したと信じていたという点は、コロンブスが自ら『ジョン・マンデヴィルの書』に言及しているわけではないにせよ、自明の理として受け入れられてきた。[3]この「誤解」は、コロンブスは一体何を発見したのかをめぐって諸説を生んだ。アメリカを旧大陸の一部と信じていた以上、そもそも「発見」ではないという認識論的な見解が示される一方で、コロンブスは最初からアジアではなく新大陸を目指していた、あるいは古代から知られていた南方大陸（テラ・アウストラリス）を探していたという、『ジ

ョン・マンデヴィルの書』の影響を最小化するような説も提示された。[4] その背景には、近代になって、紀行文学とは実体験に基づいた旅の記録であるという認識が一般的になると、『ジョン・マンデヴィルの書』はその基準から外れた荒唐無稽なフィクション、あるいは偽書とみなされるようになったという事実がある。そこには、この怪しげなテクストとアメリカ発見のあいだに距離を置きたいという密かな願望が感じられなくもない。しかし、15世紀末における『ジョン・マンデヴィルの書』の受容は、その後の評判の下落とは別問題である。

『ジョン・マンデヴィルの書』については、19世紀以降、作品の典拠やモチーフ、あるいは写本の異同に関して精力的に研究がなされてきた。[5] しかし、この作品が、中世においていかなる意味で紀行文学なのかについては未だ十分に論じられていない。そのことは、中世において紀行文学の領域をいかに定めるかという、ジャンル規定と関わってくる。本稿の目的は、近代において毀誉褒貶激しい『ジョン・マンデヴィルの書』を中世文学の文脈においてとらえ直して、その伝統性と独自性を明らかにし、それに即してコロンブスによる受容により明確な輪郭を与えることにある。

I

1357年頃に著された『ジョン・マンデヴィルの書』は、16世紀に至るまでもっとも広く読まれた東方旅行記である。語り手は冒頭で、自分はジョン・マンデヴィルという名のイングランド出身の騎士であると自己紹介する。マンデヴィルは、イングランドを出立してエルサレムとその周辺の聖地を巡礼し、その後コンスタンティノープルから黒海を横断してアジアに入り、大ハーンの帝国を訪れ、その奥にある皇帝プレスター・ジョンの国まで旅をする。しかし、そのさらに先の地上楽園（エデンの園）には暗黒地帯に遮られて近づけなかったので、引き返して帰国し、1356年に本書をまとめたと述べる。つまり『ジョン・マンデヴィルの書』は、それより数十年前に記されて人気を博したマルコ・ポーロとルスティケッロ・ダ・ピサの『世界の記 (*Devisament dou monde*)』（『東方見聞録』）と同様に、好奇心あふれた知的な旅人による東アジアへの遠征記という体裁をとっている。15世紀の終わりまでにフランス語、英語、ラテン語、ドイツ語などヨーロッパの諸言語で様々なヴァージョンが生まれ、250点以上の写本と数十の初

期刊本で現存している。

その内容は驚異譚な要素を多分に含むため、信憑性を疑う声は常に存在したが、ジョン・マンデヴィルは近代以降も、たとえば'English Ulysses'と呼ばれて、大旅行家として敬愛されていた。[6] しかし、19世紀に写本・本文研究が本格化するとマンデヴィル神話は崩壊する。1820年にHugh Murrayは、ポルデノーネのオドリコの『東方地誌(*Descriptio Orientalium Partium*)』(1330頃)と比較して、『ジョン・マンデヴィルの書』の記述は多くがその引き写しであること示し、旅行記はまったくの捏造であると断じた。[7] 19世紀後半には、ジョン・マンデヴィルは嘘つきの代表格で、その旅行記は偽書であるという見解が広く一般に定着したようである。[8] 今日では、他にもボルデンゼレのヴィルヘルムの『海外諸地域ついて(*Liber de quibusdam ultramarinis partibus*)』(1336)など、複数のラテン語の著作を典拠として編纂されたことがわかっている。加えて、イングランド出身の騎士ジョン・マンデヴィルもフィクショナルなペルソナで、作者は恐らくはフランス人の聖職者で、フランス語で著したと考えられている。[9]

このような作品が、実見を前提とする近代の紀行文学の範疇から外れることは言うまでもない。近代イギリスの紀行文学は、コロンブスなどを翻訳したアンソロジー、*The Decades of the New World* (1555)を嚆矢として急速に発展した。16世紀のうちにオーストラリアと南極大陸以外の地球上全ての地に関しての旅行記が英語で刊行され、特に1580〜1650年のあいだは、北米(特にヴァージニア)に関するものが圧倒的に多い。[10] 新大陸への植民を推奨したリチャード・ハクルートは、16世紀までの主要な航海記を編纂した『イギリス国民の主要な航行、航海、交易および発見』(1589)において、マンデヴィルの先駆的偉業に敬意を払って、その旅行記のラテン語版を収録したが、後版では削除している。[11]

しかし、『ジョン・マンデヴィルの書』が書かれた中世の文脈で紀行文学を定義しようとするとき、本当に旅をしたかどうかは絶対的な基準ではない。だがそれは、中世において旅とは究極的に人生の比喩であって、身体ではなく精神の状態であるという意味ではない。[12] 重要な点は、特定の場所への移動の体験が構造上の基軸となっていることで、移動の「身体的」体験はヴァーチャルでも問題ない。そうした前提のもとで、『ジョン・マンデヴィルの書』はさまざまな旅に関するテクストと、構造やモチーフ上の共通点を有している。

『ジョン・マンデヴィルの書』は、一言で言うならば、聖地とその向こうの

「大・中・小インド」を扱っている。中世においてインドはエチオピアから極東までの相当に広い地域を指す呼称で、小インドはインダス川までの地域、中インドはカスピ海の南の内陸地域、大インドは亜大陸とその先の極東を含むとされる。大インドは大ハーンによって治められていて、その広大な領土の南部はさまざまな種族が住む諸島で、コロンブスはそうした島のひとつに到達したと思ったのである。また、大ハーンの領土の北には、属国のプレスター・ジョンの国があり、そのさらに東に地上楽園がある。[13] アダムとイブが追放されて無人となった地上楽園は天上の第三圏に移設されたという説も存在したが、7世紀初めにセビリャのイシドルスが著した百科事典的な『語源論 (*Etymologiae*)』では、楽園はアジアにあって、天にも届く火の壁で侵入者から守られていると記されている。[14]

マンダヴィルが言及するオリエントの地名の多くは実在するが、それらを辿ることでマンデヴィルの足跡を再現出来るわけではない。本書の地理概念は、中世の観念的な世界図「マッパ・ムンディ」に基づいていて、[15] エルサレムを絶対的中心として、地中海を取り囲むように上半分にアジア、下方左にヨーロッパ、下方右にアフリカを配置する。地理的な正確さとは無縁なマッパ・ムンディにあえて地理的に言及していることは、「以前にあなた方は、エルサレムは世界の中心にあるということを聞かれただろう。そのことは、正午に地面に突き立てた槍がどちら側にも影をつくらないことでわかる。（中略）だから、こちら側から出発してエルサレムへと向かう人々は、そこへ上って行くのにかかるのと同じ日数で、エルサレムから地球の表面の反対の果てまで行くことができる」という記述から明らかである。[16]

地上楽園はノアの洪水でも水没しなかった高地（マッパ・ムンディの最上部）にあって、周囲をめぐる壁は苔と濯木ですっかり覆われている。そこに達するには砂漠と晴黒の国を越えてゆかねばならないが、西側から楽園へと至る道は今や完全に閉ざされている。

> 商人だろうと誰だろうと、海路でも陸路でも楽園へ行くことはできないとご理解いただきたい。砂漠には野獣がいて陸路では行けないし、山や岩、そしてそこにある暗黒地帯のせいで誰も通れない。また、先に述べた川［楽園を水源とする四大河］で行くこともできない。なぜなら、川は高所から大波とともに激しく流れ落ちるので、いかなる船も遡って進めない。[17]

地上楽園への旅は、アレクサンドロス大王がガンジス川を遡って楽園へと旅する12世紀の『アレクサンドロス大王の楽園への旅(*Alexandri Magni Iter ad Paradisum*)』に基づいているとされるが、[18] ここで注目すべきは楽園近くまで達しつつもその先には進めずに帰還した点である。

同じように長旅の末に地上楽園に到達するナラティブに、9世紀にラテン語で書かれた『聖ブレンダンの航海譚 (*Navigatio Sancti Brendani Abbatis*) 』がある。この作品は、中世アイルランドの西方航海譚（イムラヴァ）として驚異譚的要素を含むとともに、瞑想生活に相応しい孤立した場所（孤島など）を求める巡礼行としてのキリスト教的側面も持つ。[19] 聖ブレンダンの一行は、地獄への入口のような火山島やユダが捕囚されている島などを経由して、黒雲のような暗闇を抜けて、果物がたわわに実る光に満ちた島に到達する。しかし、マンデヴィル同様に、しばらく行くと川に遮られて先に進めず、そこで見つけた果実や宝石を船に積んで引き返すのである。[20]

地上楽園に到達しつつも引き返すパターンは、古代末期から16世紀まで途切れることなく著された死後世界探訪譚のなかにも認められる。12世紀後半にラテン語で書かれた『聖パトリキウスの煉獄譚 (*Tractatus de Purgatorio Sancti Patricii*)』では、オウェインという騎士が、ドニゴール州（北アイルランド）のダーグ湖上の島に実在する「聖パトリキウスの煉獄」として知られる縦坑を訪れる。その坑は死後世界に続いていて、オウェインはガイド役の悪魔たちとともに荒れ地を歩いて移動して煉獄の責め苦を巡り、最後に地上楽園へと抜ける。しかし、その先の天国（あるいは楽園の深奥部）に進む資格はまだなく、帰還を余儀なくされる。同じく12世紀に著されて、中世後期には『聖パトリキウスの煉獄譚』とともに広く知られていた『トゥヌクダルスの幻視(*Visio Tnugdali*)』でも、幻視者は天使に連れられて死後世界を巡り地上楽園に到達するが、その深奥部については垣間見ることしか許されない。[21]

同様の特徴はヴァイキングによるアメリカ大陸（ヴィンランド）発見を扱ったテクストにも見られる。10世紀にグリーンランドに入植したヴァイキングは、バフィン島、ラブラドール海岸を伝ってヴィンランドに到達したとされ、ニューファンドランド島のランス・オ・メドーには、1000年頃に停泊地として使用されていた遺跡が見つかっている。ヴィンランドがどこかについては諸説あるが、

この史実に基づいたとされる記述が13世紀に書かれた2編の「アイスランド人のサガ」—「赤毛のエイリークルのサガ」と「グリーンランド人のサガ」—に、それぞれ独立して見いだされる。ヴィンランドは、敵対的な一本足の種族も居住しているが、基本的に楽園的な場所である。『グリーンランド人のサガ』では、大きな鮭が川にも湖にも豊富で、気温も氷点下に下がらず草も枯れないので、家畜も飼料無しで冬をこせると記されているが、温暖な気候や食料の自生は楽園のトポスである。[22] また、ヴィンランドでは葡萄が豊富で小麦が自生するという記述は、両方のサガに共通してみられ、さらにブレーメンのアダムの『ハンブルクの司教たちの事跡(*Gesta Hammaburgensis ecclesiae pontificum*)』（1073-76年頃）にも同様の記述がある。[23] 島伝いに航海して楽園的な場所に到達する構造が『聖ブレンダンの航海譚』に類似しているだけでなく、野生の葡萄はカナンの地の葡萄（『民数記』13.23）を想起し、キリスト教的な楽園を連想させる。

中世のアメリカ発見については、「アイスランド人のサガ」以外にも記述がある。それは13世紀後半に恐らくアイルランドで制作された写本に残されている簡潔な北ヨーロッパの地誌で、1255年頃にラテン語で書かれたと推察される。ノルウェーの北西には2つの島があるが、さらにノルウェーの北に、新たに発見された、異教徒が大勢住む広大な島があって、そこでは川でも海岸でも良質の金がとれる。[24] 葡萄への言及はないが、豊富な金の存在はやはり地上楽園を想起させるし、また、Leonardo Olschkiは、『世界の記』において、豊富な金への言及が、マルコが訪れること叶わなかった極東のジパングの記述で初めて登場することを重視している。[25] 楽園的な最果ての地で金が潤沢であるというモチーフ上の共通点は、このラテン語の地誌を、中世的な意味での紀行文学のカテゴリーに含めることを可能としている。

以上で言及した旅のテクストは、ヴィンランドに関するものも含めて、実見に基づく旅の記録、学術的な地誌、史実を元にしたフィクション、寓意と想像の旅などとさらに分類できるが、むしろ注目すべきは、陸路あるいは島伝いに進んだ結果、楽園的な要素を持つ新たな地に到達し、そこにしばらく滞在してから帰還したという構造上の共通点である。その旅が現実世界を自ら歩む実体験か、ヴァーチャルに死後世界を移動する幻視体験か、あるいは『ジョン・マンデヴィルの書』のように、騎士というペルソナを駒に用いて卓上の地図をたどる行為かは、二次的な相違点であり、同様に、情報が『世界の記』のように主に実見に基づく

か、それとも既存の文献に依拠するかも、入手経路の違い以上のものではない。中世における紀行文学は、構造やモチーフに共通点が見いだされる、移動のナラティブの集合体である。『ジョン・マンデヴィルの書』もそのなかに含まれるのであり、そのときの選別基準は旅が事実か虚構かではない。

II

一方で『ジョン・マンデヴィルの書』の独自性は、平面的なマッパ・ムンディに基づいてオリエントを辿りつつも、同時に、世界は球体であることに繰り返し言及する点にある。ほぼ真ん中にあたる第20章は、マッパ・ムンディ的世界像を描きつつも世界周航の可能性に触れる。

> 私が認識し理解しているところでは、インドの皇帝プレスター・ジョンの国は私たちの下にある。というのは、スコットランドやイングランドからエルサレムに行くには、常に上ってゆくからである。なぜなら、私たちの国は世界の西方の低いところにあり、皇帝プレスター・ジョンの国は東方の低いところにあるからである。そして、私たちが昼のときには夜で、逆に私たちが夜のときには昼である。というのも、既に述べたように、陸と海は丸い形をしていて、上に進むとある海岸に達し、下れば別の海岸に達するのである。[26]

マンデヴィルの旅はまさに、マッパ・ムンディでは左下のイングランドから円の中心のエルサレムを通って、頭頂部に位置する地上楽園へと「上ってゆく」旅だが、その世界は球体として認識されている。

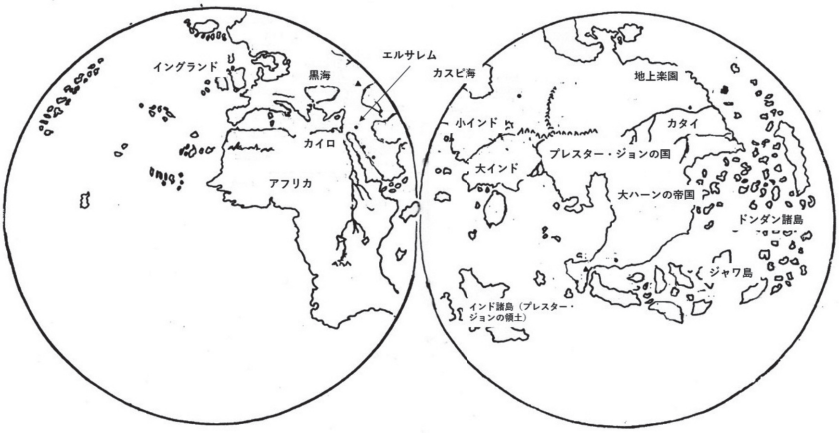
マンデヴィルはアストロラーブを用いた緯度計算によって自説を補強し、「海路が見つかって、世界を踏破する人がいさえすれば、世界の上半分と下半分のあらゆるところへ船で行けることが、経験と綿密な思考によってわかる」と断言する。さらに、この章では、ブリテン島を出立して、長旅の末に同じ言葉が話される島に到達した旅人が、実は地球を一周して故郷に帰ってきたことに気づかずに、もと来た道を戻ってしまったという逸話も紹介される。[27] もっとも、世界周航の実現可能性については慎重である。

しかし、世界を一周することが可能だとしても、自分の国へ戻る正しい道を歩めることは、千回に一度もないだろう。なぜなら、陸と海の広大さゆえに、人は千差万別な道を辿り、出立した場所へ確実に戻ってくることはできない。ゆえに、私が述べたように、世界を一周するのが可能だとしても、偶然あるいは神の恩寵によらない限り、正しい道を辿ることは誰もできないのである。というのも地球はとても広大で、その球体の周囲は、昔の賢者の考えでは上下合わせて、海は別として、20425マイルある。それを私は否定しない。しかし、私の僅かな知識では、失礼ながらそれはもっとあるように思える。[28]

こうした世界周航への言及は、本書を『聖ブレンダンの航海譚』のような根本的に想像界に根ざしたファンタジーではなく、最新の東方旅行記や科学書を典拠としてまとめられた、現実的可能性を念頭においた仮定の旅行記とみなすことを可能にする。数字をあげることで、本書は世界の広がりに制限を設けて、それが想像力にまかせて際限なく広がってゆくことも、また霊的な死後世界の次元へと移行することも許さない。人間界は、どの方角に旅立とうとも、必ず起点に戻ってきてしまう閉じられた有限な球体である。現世は一冊の書物のように有限で、神の調和のもとでそのなかにあらゆる驚異が収められているという認識は中世の基本だが、『ジョン・マンデヴィルの書』は地球儀の丸く閉じられた有限空間を想定することで、それらを実際に訪れる可能性を示す。だからこそ、地上楽園を空想で描くことはせずに、楽園の手前で引き返すのである。その第一の理由は、マンデヴィルに先へ進む資格がないことではなく、純粋に地理的に道が閉ざされているからである。そして続いて再び、周航の可能性が言及される。

私は、先に話した、プレスター・ジョンの国の島々に戻ろう。そこは、私たちからは地球の反対側にあたる。そしてそのさらに先の他の島々を辿って、裏側から地球を一周したい者は、神の恩寵により、正しい道から逸れなければ、出立したその場所に正確に戻って、地球を一周できる。しかし、航海にとても長い時間がかかるし、さまざまな島があり海がありで、多くの危険をくぐり抜けねばならないため、前にも言ったように、十分な備えがあれば可能とはいえ、その航海を試みる人はほとんどいない。[29]

マンデヴィルは大インドの先には島々がつらなり、それを辿ることで最終的に地球を一周できると考える（図参照）。未知の海域には航角を示すポルトラーノ海図も存在しないので、島伝いの航海は、『聖ブレンダンの航海譚』や「アイスランド人のサガ」に見られるように、中世において海上を旅する唯一の現実的方法である。[30]



図：『ジョン・マンデヴィルの書』の地球[31]

Mary Campbellは、『ジョン・マンデヴィルの書』の斬新さは、絶対的なものによって旅が終了されることを回避した点にあると指摘する。[32] 楽園の手前で引き返すマンデヴィルは確かに旅を終了してはいないが、しかしそれは、旅の最終目的地は現世には存在しないという中世的な旅の理解に即した、伝統的な展開といってよい。斬新さはむしろ、中世の終わらない旅を有限の丸い地球上に展開し、逆ルートで同じ場所に到達する可能性を示した点にある。

マンデヴィルが示した球体として閉じられた世界像は、コロンブスに限らず15、16世紀に広く注目を集めた。現存する最古の地球儀を1492年にニュルンベルクで制作したマルティン・ベハイム、近代地図製作の創始者とされるオルテリウス、さらにメルカトル図法で知られるゲラルドゥス・メルカトルも本書を参照したとされる。[33] また、ウォルター・ローリーも『ガイアナの発見(*The Discovery of Guiana*)』（1596）でマンデヴィルに言及している。[34]

しかし、本書を最も深読みしたのはコロンブスで、残された書簡や報告には、最終目的地の地上楽園へのこだわりが少なからず見られる。第1次航海の報告「計理官ルイス・デ・サンタンヘルへの書簡」では、キューバ島の記述において楽園的レトリックを多用している。[35]『ジョン・マンデヴィルの書』の影響がもっとも顕著なのは第3次航海の記録である。コロンブスによると、地球は完全な球体ではなく梨のよういびつで、「梨果の突起部に当たる頂点のように高くなっている」箇所に地上楽園は位置している。そして、海面が隆起する現象に遭遇して（オリノコ川の河口あたりと推測されている）、自分が楽園のある高地の近くまで航行してきたことを、セビリャのイシドルス『語源論』、ベーダ『時間論』、ペトルス・コメストル『スコラ学の歴史』など中世の代表的な権威を引き合いに出して主張する。[36] 権威テクストによって個人的経験の真実性を保証するやり方が典型的に中世的であることは言を俟たない。さらに高地の地上楽園には到達不可能であると述べる箇所は、意図的ではないにせよ『ジョン・マンデヴィルの書』に酷似している。

> しかしながら私は、この最も高いところまでは航海できるものとも、またそこまで水があるとも、またそこまで登れるものとも思っておりません。と申しますのは、彼の地こそは地上の天国であり、彼の地へは神の御意志による以外は誰も到達できないものと考えているからであります。（...）
>
> これらのことは、位置についても、聖にして、賢である神学者たちの意見と一致しており、それはこの地が地上の楽園であることの大きな証左であります。またその様子もまったく符合しておりますが、私はかつて、このように多量の淡水が流れ込んで、塩水と一緒になっているのを見たこともなければ、またこういうことを読んだこともないのであります。それにまた、このまことに快適な気候もこれを裏づけるものであります。[37]

コロンブスは、『ジョン・マンデヴィルの書』そのままに、楽園到達は物理的にも資格の上でも不可能であるとのべ、さらに楽園に関して確認し得た全てのことは、権威ある神学者の記述と合致すると主張する。『ジョン・マンデヴィルの書』のいくつかの中英語版には、帰路にマンデヴィルがローマの教皇庁を訪れるエピソードが挿入されている。マンデヴィルは「博識で賢明な枢機卿会の見解に

より我が書が審査、訂正されることを」依頼し、その結果、自分の旅の記録が教皇庁にある権威ある書物の内容と完全に一致することが「聖父により確認され証明された」と主張する。[38] その書物には「百倍もの事柄が記されていて」、さらにその書に基づいて「世界地図」（マッパ・ムンディ）も制作されたのである。ここでマンデヴィルが担保したい点は自書に記された情報の正確さであり、自分が実際に旅をしたことではない。そしてコロンブスも同じやり方で、自分が知り得た情報の信憑性を、伝統的権威によって保証しようとしているのである。

一貫してテクストから情報を得ている『ジョン・マンデヴィルの書』では、こうしたやり方は一種のトートロジーではあるが、何ら矛盾は生じない。一方でコロンブスは、その執拗な地上楽園への言及にはカトリック両王への政治的自己アピールもあったとはいえ、実在する未知の土地と既知の世界像とを対応させようと腐心している。しかし、新世界を知れば知るほど、それが伝統的な楽園描写とは異なることも明らかになる。コロンブスの姿勢は中世的には一貫しているが、『ジョン・マンデヴィルの書』への過度の依存は、植民化という目的のもとで現実との齟齬を露呈させることになり、近代以降の読者にとっては、前近代的な権威への不信感へと結びついた。『ジョン・マンデヴィルの書』をめぐる居心地の悪さは、中世の紀行文学の前提のもとでは自己参照的に矛盾なく閉じていた本書を、近代初期になって変化したジャンル意識に当てはめようとしたことから来る。しかし、そのことが同時に、中世的に綺麗に閉じていた地球を、アメリカへと開くことになったとも言えるのである。

註

1 Norman F. Cantor, *Inventing the Middle Ages: Lives, Works and Ideas of the Great Medievalists of the 20th Century* (New York, 1991); D. W. Robertson, *A Preface to Chaucer: Studies in Medieval Perspective* (Princeton, NJ, 1962); Lee Patterson, 'Introduction: Critical Historicism and Medieval Studies', in *Literary Practice and Social Change in Britain, 1380-1530,* ed. by Lee Patterson (Berkeley, CA, 1990), p. 4.

2 Luis Weckmann, 'The Middle Ages in the Conquest of America', *Speculum*, 26(1951), 130-41.

3 Charles Moseley, 'The Travels of Sir John Mandeville and the Moral Geography of the Medieval World', *PORTAL: Journal of Multidisciplinary International Studies*, 12.1(2015),

1-12. 近年では、イギリスのジャーナリストGiles Miltonが『ジョン・マンデヴィルの書』の真実性を検証しようとしたノンフィクションを著している。Giles Milton, *The Riddle and the Knight: In Search of Sir John Mandeville* (London, 1996)（ジャイルズ・ミルトン『コロンブスをペテンにかけた男 ── 騎士ジョン・マンデヴィルの謎』岸本完司訳（中央公論新社、2000））.

4 Mary B. Campbell, *The Witness and the Other World: Exotic European Travel Writing, 400-1600* (Ithaca, NY, 1988), pp. 171-3.

5 主要な研究としては、Christiane Deluz, *Le livre de Jehan de Mandeville: une «géographie» au XIVe siècle* (Louvain-la-Neuve, 1988); Iain Macleod Higgins, *Writing East: The "Travels" of Sir John Mandeville* (Philadelphia, 1997); Rosemary Tzanaki, *Mandeville's Medieval Audiences: A Study of the Reception of the Book of Sir John Mandeville (1371-1550)* (Aldershot, 2003); *A Knight's Legacy: Mandeville and Mandevillian Lore in Early Modern England*, ed. by Ladan Niayesh (Manchester, 2011) を参照。

6 Thomas Coryat, *Coryat's Crudities* (London, 1611); *Coryat's Crudities*, 2 vols. (Glasgow, 1905), I, 303.

7 Hugh Murray, *Historical Account of Discoveries and Travels in Asia, from the Earliest Ages to the Present Time*, 3 vols (Edinburgh, 1820), I , 197.

8 Cf. George Somes Layard, 'Sir John Mandevil Liar', *The Pall Mall Magazine*, 2.10 (Feb 1894), 670-83.

9 M. C. Seymour, *Sir John Mandeville*, Authors of the Middle Ages 1: English Writers of the Late Middle Ages (Aldershot, 1993) 参照。本論でマンデヴィルと言うとき、それは作者ではなく語り手を指す。

10 William H. Sherman, 'Stirrings and Searchings (1500-1720)', in *The Cambridge Companion to Travel Writing*, ed. by Peter Hulme and Tim Youngs (Cambridge, 2002), pp. 17-36 (pp. 20-21).

11 Richard Hakluyt,*The Principall Nauigations, Voiages and Discoueries of the English Nation Made by Sea or ouer Land...* (London: George Bishop and Ralph Newberie, 1589).

12 Cf. Anthony Bale and Sebastian Sobecki, eds, *Medieval English Travel: A Critical Anthology* (Oxford: Oxford UP, 2019): 'The practical or quasi-practical purpose of travel writing should not be exaggerated: for medieval writers, travel is a state of mind, not body.' (p. 3)

13 Tzanaki, p. 85.

14 *The Etymologies of Isidore of Seville*, trans. by Stephen A. Barney *et al* (Cambridge, 2006), p. 285.

15 Martin Camargo, '*The Book of John Mandeville* and the Geography of Identity', in *Marvels, Monsters, and Miracles: Studies in the Medieval and Early Modern Imaginations*, ed. by Tomothy S. Jones and David A. Sprunger (Kalamazoo, MI, 2002), pp. 67-84参照。

16 Malcolm Letts, ed., *Mandeville's Travels: Texts and Translations*, 2 vols, The Hakluyt Society, 2nd Series, 101-102 (London, 1953 (for 1950)), II, 332-33. フランス語の「大陸版」から拙訳で引用。

17 Letts, II, 406.

18 Deluz, p. 181.

19 Séamus Mac Mathúna, 'Contributions to a Study of the Voyages of St Brendan and St Malo', in *The Otherworld Voyage in Early Irish Literature: An Anthology of Criticism*, ed. by Jonathan M. Wooding (Dublin, 2000) , pp. 157-74 (pp. 164-65).

20 Carl Selmer, ed., *Navigatio Sancti Brendani Abbatis from Early Latin Manuscripts* (1959; repr. Dublin, 1989).

21 Robert Easting, ed., *St Patrick's Purgatory: Two Versions of Owayne Miles and the Vision of William of Stranton, Together with the Long Text of the Tractatus de Purgatorio Sancti Patricii*, EETS OS 298 (Oxford, 1991); Albrecht Wagner, ed., *Visio Tnugdali: lateinisch und altdeutsch*, (1882; repr. Hildesheim, 1989). 翻訳は、マルクス／ヘンリクス『西洋中世奇譚集成：聖パトリックの煉獄』千葉敏之訳、講談社学術文庫（講談社、2010）。『ジョン・マンデヴィルの書』と『聖パトリックの煉獄譚』については、松田隆美「死後世界への旅 ――『聖パトリックの煉獄譚』と『マンデヴィルの旅』――」河内恵子、松田隆美、坂本光、原田範行『イギリス文学と旅のナラティヴ ――『マンデヴィルの旅』から『ドラキュラ』まで』（慶應義塾大学出版会、2004）pp. 5-64参照。

地上楽園を訪れる幻視は他にもあるが、それら全てが『ジョン・マンデヴィルの書』と共通点を持つわけではない。14世紀の頭韻詩『真珠』でも、幻視者は地上楽園にいて、天上のエルサレムを垣間見るという体験をする。しかし、この作品の構造はdream visionであって移動感覚を伴わないため、死後世界探訪譚とは一線を画すのである。

22 『サガ選集』日本アイスランド学会編訳（東海大学出版会、1991）pp. 117-19.

23 *The Vinland Sagas*, trans. by Keneva Kunz, with intro. and notes by Gísli Sigurðsson, Penguin Classics (London, 2008), pp. 8, 41, 44. ブレーメンのアダム『ハンブルクの司教たちの事跡』第4部（「北方の島々の記述」'Descriptio insularum Aquilonis'）、第39章。該当箇所のみの現代英語訳は、https://www.americanjourneys.org/pdf/AJ-058.pdf で確認できる。[accessed 2020/9/3]

24 Marvin L. Colker, 'America Rediscovered in the Thirteenth Century?', *Speculum*, 54(1979), 712-26.

25 Leonardo Olschki, *Marco Polo's Asia: An Introduction to his 'Description of the World', called 'Il Milione'*, trans. by John A. Scott (Berkeley, CA, 1960), p. 60. [quoted in Campbell, p. 133 (n.12)].

26 Letts, II, 332-33.

27 Deluz, p. 472. このエピソードは、ティルベリのゲルヴァシウスがイングランド王ヘンリー2世の宮廷で執筆した逸話集『皇帝の閑暇(*Otia imperialia*)』（1204-14）, III. 45に見いだされる、地球の裏側に行って戻ってきた話に触発されたとされる。『皇帝の閑暇』も、『ジョン・マンデヴィルの書』と同様に、既知世界の詳しい地理、さまざまな驚異の記録と理性的な推論が同居した内容である。Gervase of Tilbury, *Otia Imperialia: Recreation for an Emperor*, ed. and trans. by S. E. Banks and J.W. Binns, Oxford Medieval Texts (Oxford, 2002), pp. 642-4.

28 Letts, II, 334.

29 Letts, II, 407.

30 Moseley, p. 6.

31 Deluz, pp. 400-1に基づく。

32 Campbell, p. 161.

33 Tzanaki, pp.118-21.

34 Campbell, p. 253.

35 コロンブス『全航海の報告』林屋永吉訳（岩波文庫、2011）、p. 47. 原文は*Select Letters of Christopher Columbus with Other Original Documents Relating to This Four Voyages to the New World*, edited by R.H. Major, the Hakluyt Society (Aldershot, 2010).

36 コロンブス『全航海の報告』pp. 171-2, 177-8. ジャン・ドリュモー『楽園の歴史 第１巻　地上の楽園』西澤・小野訳（新評論、2000）, p. 89参照.

37 コロンブス『全航海の報告』pp. 177-8.

38 M. C. Seymour, ed., *Mandeville's Travels* (Oxford, 1967), pp. 228-9.